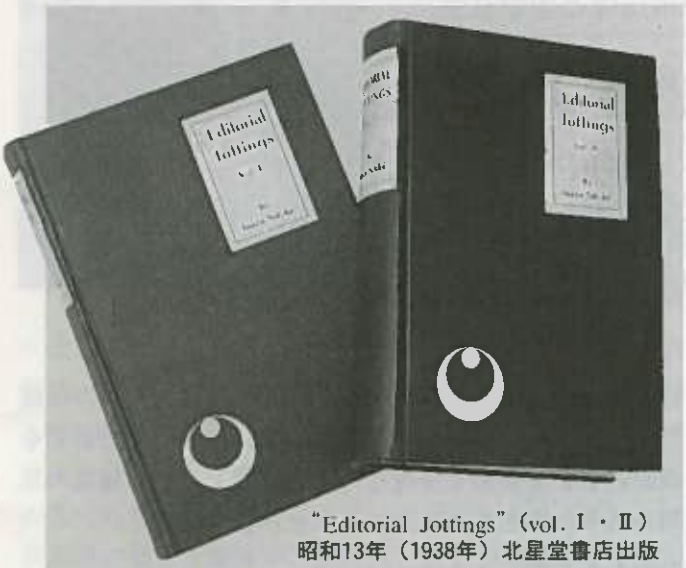
十和田市立 新渡戸記念館だより

2000年記念ワイド版



"Editorial Jottings"（vol. Ⅰ・Ⅱ）
昭和13年（1938年）北星堂書店出版

新渡戸稲造 著作紹介
"Editorial Jottings"
―新世紀へのメッセージ―

"Editorial Jottings"（編集余録）は新渡戸稲造が英字新聞「英文大阪毎日」に寄稿した同タイトルの短文の中から、691篇を収録したものです。稲造は昭和４年(1929年)から大阪毎日と東京日日の編集顧問をつとめ、それぞれの英字新聞について編集、校閲を行いました。そして、その時々に思う事をタイムリーに伝えるため、随想"Editorial Jottings"を執筆しました。昭和５年(1930年)6月1日から、稲造が亡くなった昭和８年(1933年)10月15日まで掲載された随想には、当時の政治情勢にとどまらず、時代を越えたメッセージが含まれています。

「物質の世紀」であった20世紀に対して21世紀は「心の世紀」になると言われています。新世紀をむかえるにあたって、この随想集から「宇宙の生命」という一文を邦訳と英語の原文でご紹介します。

新渡戸稲造
"Editorial Jottings"（編集余録）より

宇 宙 の 生 命

花の間を歩むとき、私は花を踏まないよう注意する。罪のないものにどうして苦痛を与えてよかろうか。泣き叫ぶ声がきこえはしまいかとおそれて、私は花をつむのをためらう。

これらの生き物は、それぞれに生きるべき生命をもっている。魂と感受性をもっている――でなければどうして、まるで愛を憧れ求めるかのように、どうしてあんなにも優しく見上げたりすることがあろうか。

われわれの眼は鈍すぎて、花の眼差の光を捕えられない。その理由は、ただその光がどこで輝いているかをわれわれが知らないからである。われわれの耳は余りにも雑なので、聴こうとしてみても、花の低い振動をきき分けることができない。

生命は至るところわれわれを囲んでいる。宇宙の鼓動は、石の中に、また植物の中に、土くれの中に、また星々の中に、深く脈うっているのである。

1933年９月21日付「英文大阪毎日」掲載
（「新渡戸稲造全集第20巻」収録訳文）

Life of the Universe

When I walk among flowers I take care not to tread upon them. Why should I inflict pain upon the innocent beings. I hesitate to pluck them for fear I may hear a wail.

These living things have their life to live. They have a soul and sensibility,—or else how could they look up so tenderly, as though they were yearning for love?

Our eyes are too dull to catch the light of their eyes, simply because we do not know where it radiates. Our ears are so coarse that they cannot distinguish, listen as we will, their low vibrations.

Life surrounds us everywhere. The universal pulse beats deeply in stones and plants, in the clod and stars.

Inazo Nitobe,"Editorial Jottings", originally published in *the Osaka Mainich*, on September 21,1933.

甘酒＆お神酒の無料サービスがありますョ！

新渡戸記念館マスコット ニトちゃん

元朝参り　2000年12月31日～2001年1月1日

21世紀のはじまりを太素塚でむかえませんか？

◆レポート◆ 「武士道」発刊100周年シンポジウム
真の国際人がいた ―新渡戸稲造の市民像と国際社会―

日時：2000年10月14日(土) 13:00～17:00　場所：国連大学国際会議場

新渡戸稲造博士

新渡戸稲造の英文の著作「Bushido－the soul of Japan」（武士道）発刊100周年を記念するシンポジウムが、国連大学とユネスコの共催で10月14日国連大学において開催されました。国連大学ハンス・ファン・ヒンケル学長の挨拶に続いて、基調講演、各パネリストによる講演、パネルディスカッションが行われました。

基調講演

世界に通ずる心
― 新渡戸博士に学ぶ ―

東京高等検察庁
原田 明夫 検事長

原田氏はこの講演で国際連盟事務局次長時代の新渡戸稲造について語り、ジュネーブを中心に世界平和のため活躍した7年間の事績は、日本人としての自己確立を前提に、諸民族、文化の多様性を尊重した真の国際人のあり方を示していたと語りました。稲造は、いわゆる役人ではなく、哲学、科学、芸術など各分野における最高の知性との魂の交りを通じて、「公」的なるもののために奮闘したこと、その結果世界の人びとから、「友」として受け入れられたことを、事務局次長退任の時に事務局員250人余の署名簿とともに贈られた「送別の辞」の言葉を引いて紹介しました。

4名のパネリストによる講演

真の国際性
― 多様の統一 ―

関西外国語大学
佐藤 全弘 教授

佐藤氏は21世紀の人類が直面する最も重要な問題として「平和」と「環境問題」をあげ、稲造が与えるメッセージとして、平和については「多様性の重視」と「その統一の模索」、環境問題に対しては「東洋的神秘主義的自然観」による「西洋的機械的自然観」の補正が考えられるとしました。そして、今後の日本が歩むべき道として ①真の絶対的価値観への立脚 ②多様性実現の努力 ③地方自治の重視 ④個性を尊ぶ教育の実践 ⑤生物の種の多様性の尊重 などをあげ、これらは国家の視点を超え世界を視野において初めて実現し得ることで、国際人稲造の思想は我々に大きな示唆を与えると指摘しました。

「癌細胞の病理学」VS「人間社会の病理学」
― 「癌学」を通して
現代を見る眼を養う ―

癌研・実験病理部　樋野 興夫 部長

樋野氏は、人間の癌化は根源的な問題であり、「癌病理」は「人間社会の病理」に指標を示し、時代の問題の解決にも寄与できると指摘しました。樋野氏によると、癌の進展が開いた扇のように小さな一点から始まり着実に広がっていくことと、新渡戸稲造の著書『世渡りの道』の一節「禍（わざわい）の起こるは起こるときに起こるにあらず、由（よ）って来るところ遠し」を引いて、その類似性を指摘し、一人の人間の問題は社会全体のものであり、同時に一人の人間が社会全体にもたらすものの大きさを示唆しました。またひるがえって新渡戸稲造という一人の人間が社会をどれほど救うかを語り、教育の重要性を語りました。

外交と人間関係
― 信頼関係の重みとその限界 ―

外務省北米局
河野 雅治 参事官

河野氏は外交の本質が人と人との関係にあることを、カンボジア和平や北朝鮮との国交正常化交渉などの例を示して語りました。カンボジア和平では、思いがけず耳にした国民の平和を望む生の声が、そして北朝鮮との外交では、外交舞台の裏にある民衆の現状を肌で感じたことが、外交活動の大きな原動力になり、新渡戸稲造が優れた国際感覚によりおこなった「外交の擬人化」とい ➡

う手法から学ぶことは大きいと語りました。しかし外交活動では癒せない人びとの心の傷をどうやって取り除いていくかは、今後NGOとの連携などいっそう細かい活動が要求されるとして、今後の課題を提起しました。

新渡戸稲造に学ぶ

アートディレクター
アートフロントギャラリー
北川 フラム 代表

北川氏は総合ディレクターとして関わった「大地の芸術祭－越後妻有アートトリエンナーレ2000」の紹介を通して、新渡戸稲造が課題とした「農に根ざした倫理」「キリスト教がもつ労働の価値」「文化がもつ相互理解の機能」の現代的意義を提起しました。典型的な「里」であった新潟県の農村・妻有が、過疎化、農業の衰退により活力を失っていく中、地域のアイデンティティの再生を目指してこの活動を行ったが、地域固有の場が生きていくためには、やはり国全体の事を考えていかなければならないことを明確に感じたと語りました。

パネルディスカッション
－ 会場からの質問に答えて －

◆家庭問題について「武士道」をふまえてどのようなアピールができるか？

原田氏は「子供が悪くなったのは、高度成長期、バブル期と子供に生きる力を与えてこなかった大人の責任。父親が父としての責任を果たしていなかったためでは」とし、佐藤氏より「父親が家にいる時間を増やすべきであり、そのために学校や会社の勤務形態を変革する必要がある」との話がありました。また、樋野氏からは「親はまずYes、Noをはっきりさせ、そして何を考え何をしているかを子供に見せるべき」との意見が、河野氏からは「子供に外に出て異文化に交わる事をしてほしい」との話が出ました。北川氏は「親も子供も公的な場へ関わる機会が減っているが、公的な“垂直的な場”にもっと関わっていくべき」と語りました。

◆世界平和の鍵は？

北川氏は「全ての人が何らかの戦争体験があれば、戦争は無くなっていくのでは」との意見を述べ、河野氏は「“誠意・愛・心”が鍵であり、それを伝える手法は“言葉・理・器量”である」と語りました。

◆子供たちに「命」にかえてでも守るべきもの教えるべきか？

シンポジウムコーディネーター小関哲哉氏（国際問題研究所ATWI所長）より「現代の日本人には失われ、外国人がもちつづけている美徳に“親孝行”がある。命をかけて守るべきものは“家族”では」との意見が出ました。

◆「公」の大切さは時代によって変化する。どのように普遍的な「公」というものをつくっていくのか。宗教以外にどのようなものが考えられるか。

佐藤氏より「真の絶対をどう見出し、どう掴んでいくかは人それぞれ多様。信仰は一つの公として色々な問題を乗り越える糧となることもあるが、宗教ならなんでも良いわけではない。100%“誠”や“良心”“正直”を貫く事は出来なくても全ての人に“内なる光”はあり、公をどう自分の中で作っていくかは、求める心さえあれば見出す事ができるのではないか」との意見がありました。

パネルディスカッションの様子

岩手県立博物館開館20周年記念特別企画展「北の馬文化」に当館所蔵・馬鎧を貸出協力

2000年10月5日～11月26日まで岩手県立博物館で開催された企画展「北の馬文化」に、当館所蔵の室町末期の馬鎧一点を貸出しました。

岩手県立博物館では、今年開館20周年であると同時に2000年という節目の年にあたることから、岩手県ミレニアム事業の一環として、歴史、民俗、考古、美術、自然科学など分野を超えて「馬文化」をテーマに展示し、講演やシンポジウムなども行ないました。

馬鎧は馬型に展示されました。

第48回全国博物館大会において新渡戸館長がパネリストと分科会講師をつとめました

11月9日～10日に仙台市民会館（宮城県仙台市）で開催された第48回全国博物館大会（日本博物館協会主催）シンポジウム「21世紀に相応しい博物館づくりを目指して」（9日）で当館新渡戸館長がパネリストの一人として、小規模館の現状やあるべき姿などについて意見を述べました。分科会Ⅰ「家庭・学校・地域とのつながり」（10日）では講師をつとめ、地域連携のあり方について意見を交わしました。また、大会の終りには「生涯学習の中核機関として“対話と連携”のキーワードのもと地域社会とのつながりを強めるとともに、博物館ネットワークづくりを進める」という決議が採択されました。

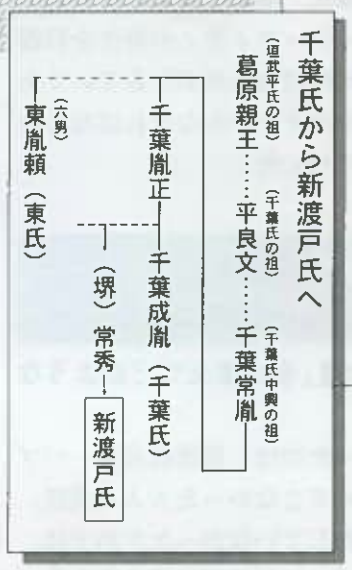
▲パネルディスカッションで意見を述べ合うパネリスト各氏。（右が新渡戸館長）

◀分科会Ⅰの様子

新渡戸氏ゆかりの地調査６
新渡戸氏の源流－千葉氏の足跡をたずねて
平成12年10月12日～13日調査

新渡戸氏と千葉氏

新渡戸氏は千葉氏から枝分かれした一族です。「新渡戸氏系譜」によると文治5年（1189年）奥州藤原泰衡（やすひら）との合戦に、千葉常胤は東海道（現・常盤道）軍の大将として一族を従えていました。この時下野国（しもつけのくに）「新渡戸」の駅で泰衡の刺客を常胤（つねたね）の孫・堺常秀が討ち、その功で下野国新渡戸、高岡、青谷の三郷をもらいました。そして5代後の貞綱は新渡戸の郷に居城し、姓を新渡戸と改めました。



◀南部盛岡藩に提出した家系図では新渡戸氏の初代は常秀となっている。

■ 千葉県内各地に残る千葉氏信仰の場 ■

今回は千葉氏研究家・鈴木佐（すく）氏のご案内で、千葉県内各地に残る千葉氏ゆかりの神社仏閣を中心に回りました。

◆千葉氏の古い墓石が残る・大日寺（千葉市）

大日寺は千葉氏の菩提寺で、境内には鎌倉時代～室町時代にかけての五輪塔（16基）や多層塔などがまつられ、これらは千葉常兼から胤将にわたる千葉氏16代のものと伝えられています。墓に刻まれた銘文はほとんどが消えて判読できませんが、中には文安2年（1445年）の年号が刻まれているものもあります。また、この寺には新渡戸稲造も訪れ先祖をしのんでいます。

◀大日寺境内の千葉氏代々の墓所。大日寺は古く千葉神社南側にあったが、戦災により焼失し現在地に移された。

◆千葉氏の祈願寺・芝山仁王尊観音教寺（芝山町）

芝山仁王尊観音教寺は千葉氏の祈願寺で、寺所蔵の美しい十一面観音像（鎌倉時代初期）は千葉氏の姫君の姿を写したものと言い伝えられています。また、室町時代の千葉氏当主・胤直は嘉吉2年（1442年）結城合戦に勝った御礼と戦死者の供養のため、この寺に宝塔を建立しています。現在宝塔は残っていませんがその棟札が寺に残されています。

◀今回の調査では千葉氏研究家・鈴木佐氏（後列左）のご案内で、濱名徳永住職（前列右）にお話を伺う事ができました。

◆千葉神社―千葉の妙見さま―（千葉市）

千葉神社の前身である北斗山金剛授寺尊光院は千葉氏が妙見をまつった寺といわれています。千葉氏は元服の儀式をここで執り行うなど妙見を厚く信仰し、千葉氏が天正18年（1590年）に滅亡してからもこの地域では尊光院を「千葉の妙見さま」と呼んでいました。明治元年（1868年）の神仏分離令によって寺院を廃して千葉神社と改称され、妙見さまは主祭神・天御中主大神となっています。現在の社殿は平成2年（1989年）造営されたもの。全国でも珍しい重層社殿で、2階拝殿が“北斗殿”1階を“金剛殿”と称し、どちらからでも拝礼できます。

▲千葉神社社殿

◀現在千葉神社旧社殿には学問の神・菅原道真を勧進し「千葉天神」となっている。

◆千葉氏が厚く信仰した千葉寺（千葉市）

縁起では、和銅2年（709年）東国を廻っていた行基が池田郷の池で「千葉の青蓮」（たくさんの蓮の葉）に霊を感じ、一丈六尺（約５ｍ）の十一面観音像を刻みました。その話を耳にした聖武天皇の勅命で堂舎を建立し、海上山歓喜院青蓮千葉寺と称したといいます。永暦元年（1160年）雷火で伽藍が焼けて現在地に移転し、この頃から千葉氏の厚い信仰を受けるようになったと伝えられていますが、昭和25年、27年の発掘調査で、旧寺の境内は70間（約126ｍ）四方であったと推定され、奈良時代の瓦が出土したことから、永暦以前すでに大伽藍がここにあったと考えられています。真言宗の寺で十一面観音を本尊とし、坂東33ヶ所観音札所の29番となっています。

▲千葉寺社殿。社殿右には709年に、僧・行基がもたらしたと伝わるイチョウの古木がある。また、古くは境内で仮面をつけて身分の上下なくののしり笑いあうという「千葉笑い」の奇習が行われていたという。

▼社殿には千葉氏の紋「斜め月星」が付いている。

同じく千葉氏から派生した名族・東氏

千葉氏より派生した一族は全国に数多くあります。東氏は千葉常胤の六男・胤頼が、現千葉県東庄町周辺の領主となって東氏を名乗ったのがはじまりで、胤頼は京で大番役などをつとめて、2代目重胤は鎌倉将軍・実朝から信任を得て「無双の近侍」と呼ばれました。3代胤行は和歌の才能を発揮して文官としても重用され、実朝が藤原定家の和歌の弟子であった関係から胤行は定家の孫娘を妻にしています。「新渡戸氏系譜」には常秀から４代後の常邑の妹が東氏村の妻となったと記されています。

◆千葉常胤が東頼胤におくった妙見像（東庄町公民館）

妙見様は北辰菩薩とも呼ばれ、北辰とは北極星または、北斗七星を指すといいます。東庄町公民館には千葉常胤が東胤頼に贈ったと伝えられる妙見菩薩立像があります。妙見様は蛇のような頭を持つ亀に乗っていますが、ご案内いただいた鈴木氏によると、中国古代思想の方角の神・四神の一つで北を守る玄武を象徴するとのことです。

妙見菩薩立像（東保胤氏所蔵）

◆東氏菩提寺・芳泰寺に残る頼胤の墓石（小見川町）

小見川町の通性山芳泰寺が東氏の菩提寺で、寺の北側には東氏の居城・森山城址が広がっています。また芳泰寺には東氏の祖・東胤頼夫妻のものと伝わる五輪塔が残っており、現在小見川町指定文化財となっています。

大きい方が胤頼で▶
小さい方が夫人のもの

はにわと美術のユニークな博物館

歴史の里・芝山ミューゼアム

―芝山仁王尊観音教寺付属館―

1階は芝山古墳群から出土した〝はにわ〟200余体など各種考古遺物の展示、2階は仏教美術や現代アートの展示となっています。千葉氏の展示コーナーもあり、見ごたえ充分の博物館です。ぜひ一度ご覧下さい。

芝山仁王尊ホームページ
http://www.evam.ne.jp/niouson/

▲飾り馬　6世紀
芝山ミューゼアム所蔵

ありがとうございました

◆十和田市内在住の瀬川安雄さん・杉山豊美さんより菊の鉢植え３点を記念館入口に出品いただきました。

◆八重樫石材店・八重樫時男さんより太素塚境内の新渡戸稲造墓前に手水鉢（ちょうずばち）を寄贈いただきました。

関　連　情　報

●外務省連携シンポジウム「外交の窓in十和田」開催

新渡戸稲造ゆかりの地十和田市にて外交問題を考えるシンポジウム「外交の窓in十和田」が11月17日十和田富士屋ホテルグランドホールで開催されました。太素顕彰会ならびに当館も実行委員として参加し、シンポジウム翌日には外務省の方々が当館を訪れました。

●写真集『目で見る十和田・三沢・上北の100年』出版

明治・大正・昭和期の十和田、三沢、上北郡の写真をあつめた写真集『目で見る十和田・三沢・上北の100年』（郷土出版社）が出版されました。当館所蔵の写真から明治2年（1869年）新渡戸傳写真、昭和24年（1949年）国営開墾事務所訪問の高松宮殿下写真など数枚が掲載され、新渡戸館長が「三本木の開拓」「馬とともに」「南部縦貫鉄道」の3つのエッセイを寄稿しています。

●太素塚境内児童公園の遊具並びにベンチの更新と新渡戸記念館北側駐車場整備が行われました

更新された遊具▶

●10月1日～11月30日の来館小学校

（十和田市）洞内小学校・北園小学校（八戸市）新井田小学校・是川小学校・城下小学校・多賀台小学校・白銀南小学校・豊崎小学校（三沢市）三川目小学校・根井小学校（五戸町）南小学校（六戸町）折茂小学校・長谷小学校（七戸町）七戸小学校（上北町）第一小学校・上北小学校（東北町）蛯沢小学校（階上町）石鉢小学校（名川町）剣吉小学校（平内町）小湊小学校（南部町）南部小学校（六ヶ所村）戸鎖小学校（天間林村）東小学校（東通村）石上小中学校

●東奥日報社「くらしの知恵」で十和田市と当館を紹介

東奥日報社広報誌「くらしの知恵」第255号に「十和田市～近代都市先駆けの街」として新渡戸三代の開拓の歴史とともに、当館が紹介されました。

記念館資料の提供

●岩手県立博物館企画展へ当館所蔵馬鎧貸出（詳細3面）

●9/12～9/18八戸市立小中野小学校へばんづる複製貸出

活　動　報　告

●館長講演会

10/3　平成12年度全国消防長会東北支部警防実務研究会（十和田富士屋グランドホール）

10/25　セールスプレイヤー会議（八戸グランドホテル）

11/16　平成12年度全国市区選挙管理委員会連合会東北支部会（奥入瀬渓流グランドホテル）

●第48回全国博物館大会で館長パネリスト（詳細4面）

●盛岡市中央公民館で兵法関係資料調査（詳細次号）

●11月７日～10日三本木中学校２年生職場体験学習「三中トライやるウィーク」の生徒２名受け入れ

団体案内を補助する八島康二郎くん・齊藤寛和くん▶

〈編集後記〉

20世紀末最終号を6面で発行する事ができました。ホームページもこの一年で約10,000件のアクセスがあり、21世紀への足がかりとなりました。どうぞ皆様良いお年をお迎え下さいますよう祈念いたしております。

発　行　太素顕彰会
十和田市立新渡戸記念館
〒034-0031 青森県十和田市東三番町24-1
TEL（FAX）0176-23-4430
E-mail:nitobemm@hi-net.ne.jp
http://www.towada.or.jp/nitobe/
印　刷　有限会社 岩間印刷所